

特徴ある教育体系をアピール

今春から薬学教育6年制がスタートし、各薬系大学は、病院や薬局で高い能力を発揮する薬剤師の輩出を強く意識するようになってきた。9月30日と10月1日の2日間、金沢市で開かれた第16回日本医療薬学会年会で行われた特別展示には、全国66薬系大学のうち38大学が出展。各大学の特徴的な教育体系をパネルで解説し、関係者にアピールした。

国立薬科大学は、高齢者の医療や福祉に薬学的視点を持って関わることでできる薬剤師の育成を目指した教育の概要を紹介した。大学近隣の介護施設と連携し、車椅子の操作を学ぶなど介護体験学習を行うほか、ボランティア活動を実施。さらに、介護施設のスタッフによる講義を行うという。高齢者医療では介護との連携が不可欠であり、医薬品服用後の経過観察を行える地域密着型薬剤師は、チーム医療の中で重要な役割を担うことが期待されるとした。

北海道薬科大学は、地域医療に貢献できる薬剤師の養成に向けた教育体系を紹介した。北海道全域の医療機関や医療施設と連携し、体験型の学習を1～3年次に継続して実施す

る。2007年度から本格的に展開する計画という。病院や薬局での早期体験実習、医療行政施設や介護・養護施設での生活支援や医療活動への参加を通じて、特に過疎地医療への参加を志す薬剤師を育成する考えを強調した。

九州保健福祉大学薬学部は、臨床能力を有する実践型の薬剤師育成に向け、ベッドサイドでの実習を強化した教育を展開すると報告。▽バイタルサインや褥瘡の色や匂いによ



薬大38校が行った特別展示

38薬大が医療薬学会で特別展示

り、最適な薬物投与計画を考えさせる教育システム▽薬学的観点から医師の処方を検証し、薬学的診断を踏まえ薬物治療を考えることのできる教育システム——などを構築すると紹介した。

模擬試験は“プレ国試”

夏休みが終わり、後期の授業が始まってから既に3カ月が経過した。薬学4年生の誰もが「そろそろ本格的に勉強しなくちゃ」と考えている頃であり、大学の講座も国家試験対策の演習講義が佳境に入っている時期だ。

自己分析こそ合格の秘訣

この時期は、

「そろそろ本気出さなきゃ！」

「まだ間に合うよな～」

「まだ何にも手をつけてないや～、アイツもやっとなさそうだし何とかできるだろう」

「私、何から始めればいいんだろう!？」

——等々、みんなの悲鳴が聞こえてくる頃なのだ。だが、やらなければならないということは分かっている、先が見えないために、どうしたらいいのか悩んでしまう。

道と一緒に、目的地がはっきりしなければ、いくら進んでもゴールには到達できない。また、目的地が遠いと、あちらこちら寄り道をしたり、迷ったりして、いつまで経っても先が見えてこない、これまたゴールにはほど遠いのだ。勉強のスケジュールも同じで、遠くを見すぎる(目的が大きすぎる)と、たどり着けないことを理解しておいてほしい。

まずは、

①自己分析

②目的地を近くに設定

③優先順位を明確に

後は、実行あるのみ!である。ただし、これが一番面倒なのだが……

誤答した分野の学習を優先

だが、自己分析といっても、どうすれば

良いのか?と悩むかもしれないが実はとても簡単なことである。この時期は、国家試験に向けた演習試験や模擬試験が実施される頃だから、それを利用すればいい。

今までの試験は、実力を知るのが怖くて適当に受験したなど言い訳は関係なく、結果が全てと思ってそれを分析することだ。では分析の仕方を伝授しよう。なかなか、分析の仕方を授けてくれる指導者がいないのも悲しいことだが……

どんなテストでも、平均点が出る。その中でも、設問ごとの平均点に注目してほしい。

①全体を評価するために、正答率が一定以上の設問(例えば正答率60%以上の問題)を抽出する。

②さらに、その抽出した中から、自分が誤答した問題を最終的に抽出(*1)する。

*1で抽出された問題の分野を調べれば、知識の不十分な科目が一目瞭然と判断できる。この分野こそ、まず優先順位を高くして、勉強しなければならない範囲ということになる。

では、成果を見るにはどうしたらよいか。自分の勉強の進捗に合わせて、結果を分析する必要がある。ここで活用すべきが、学内で実施される国家試験対策講義だ。

国家試験対策講義は段階的に実施されることが多い。一度に全範囲を行うのは無理なためだ。基本的には基礎薬学と薬理学などが先に行われる。次いで苦手な科目と考えられる

国試名人のアドバイス

薬物動態学。続いて薬物治療や病院実学の応用分野へと延長させ、仕上げは点取り科目の衛生・法規・製剤学などと進めていく場合が多いと思われる。それゆえに、その講座の進度に合わせて自分の勉強進度を決め、復習する。こうした方法が一番簡単だ。

具体的に見てみよう。

①9月上旬に基礎薬学と薬理学の演習講義10日間

②10月上旬に模擬試験

この模擬試験の結果を分析する。その際に注意すべき点は総合点ではない。総合点ばかり気にする学生は多いが、それはあまり意味がない。今回は前述の*1で該当した問題が多かったとしても、基礎薬学と薬理学の範囲で*1の該当問題が少なければ優秀である。その範囲で分析し、*1の該当問題が多い部分を復習すればよいのだ。これを繰り返すことにより、全範囲を網羅できることになる。

年明けからは全範囲を模擬試験で分析するようにしていこう。

・国家試験には過去問題が出題される(20%は再出題の可能性)

・国家試験の合格ラインは65%の156点
模擬試験には過去問題が出題されていないため、その分を考慮すると124点(156点の2割に当たる32点を、156点から差し引いた点数)が模擬試験の目安になるであろう。

自己分析とは非常にいやな行為であるが、これをするか否かで、ゴールへの到達度が大きく異なってくる。

また時間配分、マークミスを防ぐ練習などは、模擬試験でしか経験できない。従って、国家試験と同様に考え、プレテストの心構えで臨むべきだ。国家試験では多くの受験生が試験時間を最後まで有効に使う。だが模擬試験となると、退出が許される時間が来ると、退出してしまう人が多い。練習といっても模擬試験の回数は限られているから、そうした行為は非常にもったいない。受かりたいなら、受かるべく行動しよう。

時間配分やマークも経験